

現代詩
小・中・高校生の部

入賞作品

広島県知事賞

大じようぶ？

広島大学附属小学校三年 安藤 一希

みんなの幸せをねがって
千二百年い上も左手をあげている大仏様
でも

手をあげたまんまで大じようぶ？

つかれないの？

夜になったら

体そうでもしているの？

それともおさんぼしているの？

本当に大じようぶなの？

大仏様 すわったままで 大じようぶ？

足 しびれないの？

花のざぶとんにすわったまんま

そんなにせすじをのぼしていて

つかれないの

せんそう 火事

色々なこわいことがあったよね

どうしてだって おこりたくなった時も

あるだろうに

それでもがまんしてきたんだね

ぼくたち人々のために

じっと見守っていて

何やってんのっておこりたくならないの？

おこりたくなるのを

がまんしていて

大じようぶ？

広島県議会議長賞

おいしいなあ

坂町立横浜小学校六年 大下 佑生

ピアニスト、イベントの司会
母はいろんな仕事をしている
どの仕事も普通では出来ない
大変な仕事だ

母は大変だけとおもしろいと言う
軽気で言うから
なおさらすごい

しかし母は料理一つしない
家事はしているのに
料理だけは祖母にまかせっきり
なぜだろう
料理さえこなせば
母はもつとすごい母親になれるのに

そんな母の中身はすごい子供
子供が大人の体
変身してしまった
まさにそんな感じだ
母はあと少しで
理想の母になれるのに

おいしいなあ

広島県教育委員会賞

BIRTHDAY

県立呉商業高等学校三年 佐々木 希美

夢の中アスファルトを歩く
暗闇に沈んだビル群
汗を滴らせて少女が走る
その後ろ姿が角に消え
追えぬまま目を覚ました

上昇する体温
見えない炎に踊らされ
芳香が春風に紛れるだけ
明け始める空の色
一人起き上がった

窓の向こうに目をやると
途轍もなく壮大な海
僕はちっぽけだけれど
水平線の端から端まで
大きな愛を持ちたいよ

自転車が弾む急な坂道
日向の夢へと誘う木漏れ日の中
小川には止め処もなく水が歌う
祝福の風が僕を幾重にも包み
また一つ大人になった

立ち止まったり走り出したり
掻き乱す夕風に
生き物のように蠢く草原
胸の奥まで届く夕陽は
心を軽くし温める

風を探し求めて
思い出した素敵な景色
変わらぬ明るい陽射しを見る
虹のように光る幸せを
空中で掴んでいた

けんみん文化祭ひろしま実行委員会会長賞

はいしやさんでどきどき

世羅町立東小学校一年 金光 凧紗

むしばができた。

ひだりがわの上。

はいしやさんにいかなければいけない。

こわいな。

いたくなってきたので、

おばあちゃんとはいしやさんにいった。

いやだな。

こわいな。

はいしやさんのいすにすわっただけで、

どきどきした。

「口をあけて。」

もう、だめ。

こわくておおきなこえで、いっばいないた。

なみだがとまらない。

はいしやさんが、

「こんどは、かくごしてこい。」

といった。

せつかくいったのに、ないただけでかえった。

いえで、またいたくなった。

なかにやってもらえば、よかった。

つぎにいくときには、かくごしていった。

おばあちゃんも、

「がんばれ。」

とおうえんしてくれた。

ピー、ピー。

キイー、キイー。

きかいではをけずった。

がまん、がまん。

わたをつめて、くすりをつけたら、

おわった。

わたしのはから、だんだん

むしばがなくなっていく。

はいしやさんが、

「がまんするのが、じょうずになったね。」

と、やさしくいってくれた。

広島市長賞

雨

県立広島観音高等学校二年 山下 景子

青かった空は
夜みたいになって

太陽の匂いがした土は
雨の匂いになった

視界は真っ白で
雨の音と

急ぐ人々の足音だけがした

髪からは水がしたり落ちて
服が肌にまとわりつく

びしょぬれだったけれど
不思議と心地良かった

私が空を見上げると
雨雲は遠くへ行ってしまうって

雲の隙間からは
太陽の光がこぼれていた

いつも眩しいだけの太陽は
私に楽しさを与えてくれた

私はなんだか晴れ晴れとして

明るい顔で
もう一度空を見上げた

広島市議会議長賞

く戦争と平和を盾にく僕らの夢、君の夢

英数学館中学校二年 足利 亮水

僕らは今、生きている。この世界を。

何のために生きる？愛する人を守るため？

それとも夢を実現させるため？

日本がまだ戦争をしていたころ、僕と同じ
まだ子どもの君たちが命をかけて守ったこ
の日本がダメになっていくよ。愛国心が失
われていくよ。人を愛せなくなっているよ。
君は何を守ろうとした？こんな日本のため
かい？こんな僕達のためかい？

なぜ銃をもった？なぜ爆弾をだいた？なぜ
敵につつこんだ？なぜこんな世界のために
泣き、死んでいった？こんな君たちを僕は
どうすればいい？

僕も銃をもてばいいのかい？僕も爆弾を抱
き、敵につつこめばいいのかい？これで君
の泪は止まるのかい？

いやそれは違うよ。今、この一瞬を君達に
アリガトウ、ゴメンヨと言いなから、生き
ることが、君達へのつぐないなんだ。

この日本、どんだんダメになっていくけど
きつと君は間違っていないよ。

アリガトウ、ゴメンヨ・・・

広島市教育委員会賞

駆ける

呉市立横路中学校三年 須郷 友有子

苦しい

肺が焼けつき、痛い

永遠と思われるような

長い長いトラックを

走っているという感覚はもはやなく

心は無に等しい

耳に流れる風の声

聞こえる音は

それ以外に仲間の声援

「頑張れ」

足が地を蹴り大地を駆ける

光のようなゴールが、そこには見える

腕を振る

足を蹴り上げる

最後の力を振り絞って

ただただゴールへ

ただただ仲間のもとへ

駆けてゆく

財団法人ひろしま文化振興財団会長賞

ドドドドーン

広島大学附属小学校三年 栗田 優輝

ドドドドーン ドドドドーン

大音きようとともに

水の中から

光のふんすいがぼくはつした

周りみんなをふつとばす

ドドドドドドドドーン

地ひびきばく風ばく音が

ぼくの体を一度におそう

金 銀 赤 青 色とりどりの光が

目の中に飛びこんで来る

大きな大きな水中花火

まぶしい光は

朝をつれてやってきた

まるで うちゅうの大ぼくはつ

宮島も月もふつとばす

ぼくも 大鳥いも

切り絵のかげをつき立てて

地面に立って見ている

現代詩 一般の部

入賞作品

広島県知事賞

直航
ちよっこう

三原市 末国 正志

今生の別れの言葉も残せぬほど
余りに唐突に逝ったお父さん
長い歳月を船長として生きたあなたですから
人の頼みを何でも受けていたあなたですから
こう言うしかないかもしれません
あなたの舵取りで船出を望むたくさんの魂が
あなたの魂を呼び続けていたのですね

いがぐり頭にきび面の中学生だった遠い日
先生が朗詠された忘れられない一首があります

「春真午まじるここの港に寄りもせず岬を過ぎてゆく船のあり」

先生は歌に続けて説明されました
船の帰りを待つ温もりの家庭を港に
なのにそこに帰らず旅する自分を沖ゆく船に
作者若山牧水は喻えているのでしようと
けれど私にとっては歌の中の
過ぎゆく船にはお父さんが乗っていたのです
牧水の目に私のところが映っていたのです

あなたからの直航という連絡を受けるたび
お母さんがさびしそうに私にそれを伝えるのを
幼い頃から耳にして育ちました

直航……それは寄港せずの謂い
その申し訳とでも言うように
家の沖合いを過ぎるとき

あなたは船笛を鮮やかに響かせましたね

「おう 父ちゃんの船か」

気づいた近所のおじさんに声をかけられながら
いつもいつもお母さんとふたり
右へ左へ体を傾けながら手を振り続けました

人生の最期までそんなふうに
誰もが待つ港へ寄ることもできず

初めての港へと直航していったあなたを

もう追うことはできないのです

海岸沿いをひたすら走り

海のひかりの中に吸われてゆく船を見つめたあと

あなたのいない時間へと

涙を拭いながら踵を返したあの瞬間と同じように

けれどきつと……

と思い直しもするのです

岬の鼻を回ったあなたの目路の先には

まっさらな船首旗が

順風に翻っているのであろうと

あなたが残した優しさの航跡を

見つめ続ければいいのですね

広島県議会議長賞

カブトガニ

恐竜像とメタセコイアの林をぬけて カブトガニ博物館にいった 一メートル近くもある黄土色のやつが壁にかかっていた でもこれはアメリカにいた剥製 その奥にこんどは裏がえされて足をばたばたやっているやつがいる だがこちらは木造の電動模型だ さらにもうひとつむこうの水槽に飼育されているのが見えた どんよりした水中に雌雄つながりあって 千年河清をまつという風体で水底でじっとしている だがこれも養殖だ 生きていない 生かされているやつだ ぴちぴちの野生の いや海棲のワイルドなやつはいないか 学芸員にきいた ほとんどいなくなりました たまに漁師の網にかかることもあります が カブトガニの時間はおわったのか 学芸員の話をきいた カブトガニは中生代に栄えた節足動物 カニの仲間じゃない クモのなかま いやクモの子孫じゃない カブトガニが陸に上がったのがクモの仲間だ カブトのようなのを被っている 角皮・クチクラといえます あちこちに突起があつて まるで中世ヨーロッパの騎士のようだ 騎士のように寡黙で柔順で いやほんとうは騎士じゃない 英語で horse shoe 馬の靴ヒヅメ型 ここ二億年のあいだ馬の靴になつて生をくりかえしてきた 鳴きもせず笑いもせず だまって伏し目で泥の腹をひきづってきた それがちかごろきゆうに断絶しはじめたという 生江島と神島のあいだに堤防ができて海が干上がった 多くのカブトガニが死んだ 博物館のテラスからみると 陸と陸のあいだに一本大川ほどの水道が残っている 六月の晴天を映してコバルトブルーの水面 どちらが上流でどちらが下流かわからない 一本の水路のなかほどの ちいさな岩の上に 朱色の祠がたっている このあたり天然記念物カブトガニ繁殖地だと？ 笠岡干拓の歴史

は古い 十七世紀寛文のむかしから土手造り
三百年 富岡太兵衛新開をへて 一九九〇年
までに計一千二百町歩 市街地面積の一角に
ちかい だがいまは一面ぼうぼうたる草原・
玉蜀黍畑・麦畑・牛舎 はるかむこうに紅白
の線香のように林立する鋼管の煙突 いつか
人類は干拓狂になったのか この緑色の平地
のすぐ裏側に 乾いた泥を枕にしたカブトガ
ニ群が 二億年の鰓書を抱いて横たわってい
るはず 微細な単眼と複眼 ちじこまった挟
角 口腔を囲む五対の肢でかき集めた砂泥
婦唱夫随の航跡 あれはカブトなんかじゃな
い ただ一本のウチワだという だがひよろ
りとした剣尾をつまんでバタバタやったとこ
ろで どれほどの風がくるというのか 風も
なくむし暑い現代の干拓地の内側のドームの
中の飼育実験室 プラスチック容器の中で
仲間と蹄をよせあつて 脱皮の時間を耐えて
いる節足類に 似ていると君は思わないか
ごくたまに狂ったように宙返りして鰓書を見
せるのもいるが おおかたはうつぶせたまま
過ごす うつぶせたまま 過ごす

【注】 婦唱夫随

カブトガニは、雄が雌に従う習性がある。

広島県教育委員会賞

親亀子亀

庄原市 田中 虎市

田んぼで四つん這いになって
草取りをしている農夫を見た外人さんが
亀が這っていると言ったとか
昔は一番草二番草は除草機で取ったが
最後は止め草といって手で取った

そんなとき幼い児がいたら大変だった
爺ちゃん婆ちゃんなど守り役が居ればよいが
妹が生まれたときは守り役はいなかった
ヨチヨチ歩きの子を家に置けないから
田んぼへ連れて行って
おふくろが背負って草を取った

四つん這いになると前のめりになるので
背中の子がぐずる
仕方がないから逆さに背中へくくりつけた
ひと息つくために腰を伸ばして立てば
逆さになった子が泣くので
すぐかがまねばならなかった

折から梅雨明けの太陽が容赦なく照りつけ
下からは稲の草いきれが吹き上げる
額に吹き出す汗が目にしみ
鼻すじを伝って水面に落ちる
腰骨のあたりは子供のヨダレでただれて
ヒリヒリと痛む
泥でよごれた着物の袖で
いくたび顔を拭いても際限なく流れる汗

炎天下で子供という重しを背負った作業は
息がつまり目がくらみ体が溶けてしまいそう
さながら太陽からの拷問のような暑さの中で
苦痛に抗ってやみくもに田草を引つ掻いた
それはまさしく子亀を背負った親亀が
泥田でもがく姿だった

あの苦難の農作業から解放されたいま

過ぎた日を偲びながら

田んぼのほとりにたたずめば

農婦という宿命のままに生きて

瘠せた小さな体でひたすらに泥にまみれた

おふくろがたまらなくいとらしい

けんみん文化祭ひろしま実行委員会会長賞
被爆地蔵

福山市 大山 真善美

石をも うがつ放射線
でこぼこの 「被爆地蔵」
ひかり を受けた側 石の表面が波打つ
ざらざらの手ごたえ これが
人間の皮膚にも襲いかかったのだ
あの日 地蔵は影を奪われた
頭上からの照射 真下にできたはずの影は
足元からの 波状熱波で 蒸散した

どのたましいが地蔵の肩に沿って上ったか
どのたましいが地蔵の耳に別れを告げたか
お母さん お母さんと 探した子ども
娘の 息子の 手をまさぐった母親
お弁当をもって 通学途中の小学生
赤ちゃんを乳母車で連れ出した祖母
すべて 影をもたない魂となつて上った
血のような色の帽子とよだれかけをつけ
今も 原爆ドームの前に佇む地蔵

夏の夜 タクシーはドームを素通りして
市民球場に向かう
公園を横切る親子 お揃いのカープの帽子
頭上に華やぐ赤 の向こう ライトアップ
あれは なに？ 目をひかれた子ども
早よ 行こう 手を引く 親
長い影 惜しげもなく 足元に伸びる
四本の足が交錯し 地面から生えている
手と手は しっかりとつながれて
帽子のきつ先 尖って大きくなっている
応援の太鼓の音がこだまし 火花が上がる
ビルや木々にまぎれて 背景化したドーム
通りすがりの いち風景にすぎない

夜のドームの中に まだ燃えている
影ももたずに 気体となったものたち
グラウンド ゼロという名も知らず

死んだことさえ 知らないで
振りむく人もなく 分つても もらえずに
めらめら ゆらめき もんどりうつて
燃えつづける ものたち

地蔵から真正面に見える

体内に なお 見えない炎を上げるドーム

お母さん お母さん どこにいるの

息子よ 娘よ 手をはなしちゃだめ

ぼくのお弁当箱 炭になった

乳母車を 赤ちゃんを 返して

むすうの小さな声を響かせている

父の足取り

広島市 有田 澄子

母が脳梗塞で倒れたのは

夏の暑い盛りだった

この日から、母は右半身の自由を失った

私は父を連れて母を見舞うのが日課になった

父の家まで車で四十分

母のいる病院はその中間にある

その日は

母が倒れてから九日目であった

父を連れて行くと、なかなか出て来なかった

父をうながし、先に靴をはいていると

「母ちゃんが今朝、おかゆを食べたんよ、

わしゃあ、うれしゅうて」

父は泣いた

その朝、母を見舞った人が知らせてくれた

母に食欲が出てきたことに安堵した

病院のエレベーターを降りると

廊下の一番奥の部屋に母がいる

九十三歳の父には

病室までの一五〇メートルはきつい

しかし、母がスプーン一杯の粥を食べたと

聞いて

父の足取りが確かになった

父を支えて歩く私には

それがはつきり分かった

母の病室に近くなると

父は力強く歩を進めた

廊下ですれ違う人への挨拶にも

力とうれしさがあふれていた

広島市議会議長賞

どん所の夏草

庄原市 森上 文恵

上野池のかしらのどん所に今年も夏がきた
杖をたよりに来て見れば

荒れに荒れて雑木や夏草ばかり
いま誰がここの事知っているだろうか

ここは多くの原爆兵士を野焼きにしたところ

広島が焼けつづれてから六十二年になる
二十五里も離れたこの地に

「広島が大ことじゃ」噂が流れてから間もなく
庄原陸軍病院へ運ばれてきた無惨な兵士たち

庄原駅に汽車の着くたびごと

列車の中はきずついた兵士でいっぱい
庄原日赤病院の隣の小学校講堂までも

もの言うことも出来ない兵士のうめき
夜も眠らず国防婦人会のひっしの看護

目からは這いでる蛆を割箸で拾った拾った

でも苦痛にもだえ逝ってしまった

兵士の出身地もわからずまして家庭への連絡
もできず

小声の兵士の「お母さん」への
うめき声も届けようがない

果ては連日ここのどん所で野焼きがつづいた

あの油地獄の煙は目の下の池を覆った

いまもこの草の根に骨片がある
木々が茂り 今日もカラスが鳴く

でもこの下道を通る人も車も六十二年前の
惨事は知るまい

過ぎていった歳月は何であったか

人は自己にあくせくして過去は忘れてしまう
あの日本の敗戦の苦痛あのなげき

まして若くして国に殉じた兵士や
原爆犠牲者の無念は忘れてはならない

私は老いたが杖でここに来た

ありし日を思えば涙がでる

【注】どん所

被爆して亡くなった兵士たちが集められ、野焼きされた場所を、作者が暮らす地域では、どん所と呼んでいた。

広島市教育委員会賞

チエンマイの恋

福山市 水嶋 佑子

博物館の二階の奥まった角
まるで付け足しのような
薄暗いローカルアートのコーナー
雑多な展示物を

横目で見ながら通り過ぎたのだが
くすんだガラスの向こうから
呼び戻された

一瞬 黒檀の彫刻と間違えたのは
真つ黒に煤けた木彫りの仏さま
立ち止った私を

柔らかな光の輪がふんわりと包んだ
くすぐったくて

——ハイ 元気？
思わず胸の前で手を振った
お顔とおぼしきあたりから
パァーッとひろがった笑いのさざ波
でも どうしてそんなお姿に

十六世紀末のラーンナー王朝の辺境の村
異民族の侵攻で火を放たれた仏教寺院
両手で捧げ持てるほどの
小さな小さな釈迦涅槃像の物語が
未明の川面を流れる霧のように

静かに心の中を過よってゆく
少しずつクリアーになる私の脳裡に
浮かびあがってきた
きらびやかに彩色された豊かなお姿
かつてあった悦びと
深い悲しみ

けれど今

この黒い姿がいとおしい
漆黒の闇の色を身にまとっていても
木のぬくもりを身内にしっかりと残している
(連れて行きたい)

突っぴようしもない願望に襲われた
そつと周囲を見回しながら
お連れしたいのですがと囁いた
どこへ——と穏やかな眼差し
日本へ 私の家に 私の腕の中に
まるで玩具を欲しがるだっ子そっくりの
この離れ難い想いは いったい何？
さあ いらしてください 私と共に

つかの間の白昼夢の邂逅は
複数の足音で突然に断ち切られた
天井で回る扇風機の風が
佇む背中になまぬるい
閉館を告げる館内放送
さようなら
と胸の前で手を振ってみただけれど
ガラスの向こう
黒い小さな仏さまは
ひっそりと
横たわったまま黙っていた

※タイ・チェンマイ国立博物館にて

財団法人ひろしま文化振興財団会長賞

モンマルトルの譜記

呉市 吉田 敬

ぼくは、岩舟町を訪ねたとき「入唐求法巡礼行記」を書いた円仁に聞いた

「なぜ旅なのですか」

身体のほうが 正しいかも知れない

同じようにするので 季節は洗い木綿 青空

に乾ききった ことばが なびく

三鷹市美術ギャラリーでは ユトリロ展を見た

「なぜモンマルトルなのですか」

白い坂道は いつもどこかに分岐がある

モンマルトルの詩情で 道に分岐はあるがそ

こに立ったことはない 道と建物の壁と空の

景色の中で描き続けた

譜記は 複雑化に対応して発達したが 源流

は入唐八家の 一人慈覚大師円仁による移植

であるところの

ワイン 似た景色 病院に入退院し 時に警

察沙汰を起こし 母や妻に幽閉され 白い道

と壁と空の景色で

もともと療法として絵筆が与えられた 画家

という自覚はなく ただ描き続けた ワイン

だけのために

「さ、ちゃんと描くのよ」

ワインが買えるからね 私の靴が買えるからね

目が覚めたら描き上げるのよ 美容院へいくからね

「さ、右手をあげて」黒い法衣の若い口元が

微笑んでいる……感触は悪くないと

水網のつぶやき

ぼくは「なぜそんなに 描写するような生き

方をするのです」と尋ねる 二人は曖昧に笑って

眠り込んでしまった 一人は水 もう一人は

水ではない ただのワイン 自分が何者
であるかを問うこともなく 景色に染まる

見知らぬところに来たから帰れないという地
の底で そこが 居場所だという あまさと
こわさのあるところ

荒野の地所で 上に青空が遠くひらけている
寒く 痛い 薄い風が吹く そうではなく

ただ白い ふかみのある白さ 景色が手にいう
「さ、右手をあげて」

土壁の砂を混ぜても おもしろいかもしれない
景色の口受 または体受

ぼくの名前はぼくから離れることはないが

固有名は、剥離し 指示対象を求めて 景色
におさまって 天台山またはモンマルトルの
詩情を映した 指示対象を失うと 無意味と
断定されるおそれがある…… 分岐はあつた
がそこに立たなかつた